

国境を越える、文化を超える

佐久間 正

井上ひさしが亡くなって4年が経った。私は彼の比較的熱心な読者だったが、ここ数年は彼の作品から離れていた。しかし、死によって中断を余儀なくされた彼の作品が相次いで刊行されていることに気づき、このところ、閑暇を見つけては死後刊行された彼の作品を読んでいる。『一週間』『黄金の騎士団』『一分ノ一』、みな小説として面白いことは勿論だが、テーマそのものがいずれも刺激的で、作者の死によって中断されたことが実に残念に思われる。今読んでいる『東慶寺花だより』は上述の作品とは異なり、作者には珍しく、彼が好んだ藤沢周平ばりの時代小説の人情話で、文体も上に記した作品とは趣が随分違っている。私は彼がこのような文体も自家のものとしていることに、これまであまり注意を払わなかった。

私は、授業の合間で自身の小説の読み方にふれる時、言うことはいつも次の二つだ。一つは、読んで面白いものでなければ読まない。「面白い」には注釈が必要だが、要は読者の存在を忘れた独りよがりの独白は好まないということ。だから、純文学と大衆文学というなお一部に執拗に残存している区分は意味がないと思うし、芥川賞と直木賞という文学アワードも区別する意味はないと考えている。私の好きな作家で言えば、松本清張が芥川賞、井上ひさしと藤沢周平が直木賞受賞者というのは、二つの賞の区分の曖昧さを端的に示している。二つは、現代日本語の文章として優れている（と思わせる）ものでなければ読まない。「優れている」という表現も曖昧だが、日本語の表現の可能性をおしひろげるものと言ってよいかもしれない。

『東慶寺花だより』の前に読んだのは、『この人から受け継ぐもの』と題された、亡くなって1年も経たないうちに刊行されたものだが、そこに載っている「ユートピアを求めて」という宮沢賢治を論じた文の中で、作者は賢治は今後ますます外国人に読まれていくと指摘している。賢治特有の思想に裏打ちされ、特徴的な語彙と文体の日本語による作品が、日本を越え、日本語を核とするその文化を超えていくというのだ。言葉を換えて言うなら、賢治の作品の普遍性と言ってよいかもしれない。それを日本語を母語としない外国人が自らのものとして理解するようになるためには、「翻訳」が不可欠だ。こうして、私は多文化の中の「翻訳」の役割という問題に関心を向ける。異なった言語の間で、ほとんど翻訳不可能な叙情詩から、ほぼ完全に翻訳できる科学言語、特に数学言語まで、翻訳の有効性には大きな幅があるというのが私の理解だが、今後ますます求められていく多文化の共生と協働のためには、どのような翻訳が、あるいは翻訳論が必要とされるのか、理論的にも明らかにしていく必要があると考えている。それにしても、現代日本語の可能性をおしひろげ、その意味で実験的とも言える宮沢賢治の作品が、国境を越え、日本を超えていくというのは実に興味深い指摘だ。